

令和6年度 東広島市教育委員会主催・広島大学マスタース共催市民講座 「小学生のための実践的な将棋講座」

広島大学マスタース会員 早瀬 光司
(日本将棋連盟五段)

開講日時：2024年8月1日(木)・2日(金)・8日(木)・9日(金) 13:30~15:00
会場：市民文化センター・研修室2 参加者：小学生10名

[1] 本講座の「目的・目標」について

本講座の目的は、各受講生が将棋を指すことを通じて「自分で考える」、「深く考える」ことを身につけることです。さらに言うなら、将棋が強くなるのが最終目的ではなく、「自分で考える」・「深く考える」力と習慣を身につけることです。これにより、各受講生が今後の長い人生において、緻密に繊細に考えることができるようになって、心豊かに、楽しく、生きていくことができるようになることが、本講座の真の目的です。

[2] 将棋を対局するときの「礼」について

将棋は、礼に始まって、礼で終わります。将棋において、対局相手は決して敵ではなく、一緒にその将棋を創り、楽しみ、互いに生長を期す、仲間であり同朋です。

[3] 上記の[1]と[2]を念頭に置いて、本講座を開催しました。

第1回 8月1日(木)：まず、10名の受講生の棋力を知るために、受講生は全ての駒を盤面に配置し、講師は、飛車、角行、銀将2枚、桂馬2枚、香車2枚の計8枚の駒を盤面から除外して(即ち、これを「八枚落ち対局」と呼びます)、王将、金将2枚、歩9枚のみの駒で対局をしました。講師が各受講生を相手に順に指して回り廻って10名全員と同時に対局(これを「10面指し」と呼びます)をしました。その結果、10局とも講師が勝ちました。これにより受講生は駒の動かし方は知っているが、相手の王将の捉え方を知らないこと、及び、受講生の棋力は、講師とは「八枚落ち対局」が相当であると判りました。

第2回 8月2日(金)：受講生全員に対し「八枚落ち対局」で勝つには、自分の駒をどのように動かしたらよいかを指導しました。ただし「こう指しなさい」と言って指させるのではなく、ヒント的なものを与えて、自分で考えてそれを見出すように促します。しかし、直接答えは言わないわけですので、できる・できないについて各受講生間の個人差も結構大きいものがあり、難しい側面も多々あります。ただ、そのような課題をどのように工夫し指導していったらよいかを考えることは、楽しいことでもありました。

第3回 8月8日(木) & 第4回 8月9日(金)：翌週も、この『教えない指導』を続けていくと、2~3名の受講生は、講師に自力で勝てるようになってきました。

『「自分で考える」ことを育むこと』は難しいテーマではありますが、大きなテーマであり、重要・必須です。「将棋を対局する」ということは、「人生の縮図」にも成っていますので、このテーマに着実に貢献できる、有力な道具であると考えています。 元氣